

2024 年度博士論文（要旨）

モンゴルの中学校におけるいじめに関する研究

桜美林大学大学院 国際学研究科 国際学術専攻

国際学術研究学位プログラム

BAYARKHUU BAYANJARGAL

目次

第 1 章 問題提起と目的.....	1
第 1 節 海外におけるいじめの現状と研究.....	1
第 2 節 日本におけるいじめの現状と研究.....	2
第 3 節 日本におけるいじめの定義.....	5
第 4 節 日本におけるいじめ実態調査.....	7
第 5 節 モンゴルの教育事情.....	10
第 6 節 モンゴルにおけるいじめの現状.....	11
第 7 節 本論文の目的と意義.....	14
第 8 節 本研究の構成.....	15
第 2 章 研究 1: モンゴルの中学校におけるいじめに関する研究 – いじめ の被害・加害経験と自尊感情及びストレス反応との関連 –	19
第 1 節 問題・目的.....	19
第 2 節 方法.....	24
第 3 節 結果.....	28
第 4 節 考察.....	31
第 5 節 今後の課題.....	34
第 6 節 研究の問題点.....	35
第 3 章 モンゴルの中学生のいじめに関する調査研究で使用する心理尺度の 標準化（その 1）	36
研究 2 モンゴル語版中学生用自尊感情・他尊感情尺度の標準化.....	36
第 1 節 目的.....	36
第 2 節 方法.....	38
第 3 節 結果と考察.....	45
研究 3 モンゴル語版中学生用ストレス反応尺度の標準化.....	48
第 1 節 目的.....	48

第 2 節	方法	49
第 3 節	結果と考察	49
第 4 章	研究 4 いじめの被害・加害経験と他尊感情・自尊感情・自己否定感，ストレス反応との関連について	51
第 1 節	目的	51
第 2 節	方法	51
第 3 節	結果	58
第 4 節	考察	178
第 5 章	研究 5 いじめの被害・加害経験に与える心理的変数の総合的影響の評価	189
第 1 節	目的	189
第 2 節	方法	189
第 3 節	結果	189
第 4 節	考察	240
第 6 章	モンゴルの中学生のいじめに関する調査研究で使用する心理尺度の標準化（その 2）	248
研究 6	モンゴル語版中学生用コーピング尺度の標準化	248
第 1 節	目的	248
第 2 節	方法	250
第 3 節	結果と考察	255
研究 7	モンゴル語版中学生用仲間へのサポート期待尺度の標準化	260
第 1 節	目的	260
第 2 節	方法	260
第 3 節	結果と考察	260
研究 8	モンゴル語版中学生用教師へのサポート期待尺度の標準化	262
第 1 節	目的	262
第 2 節	方法	262

第 3 節 結果と考察	262
第 7 章 研究 9 過去と現在のいじめ経験の高低による各心理尺度得点の差について	265
第 1 節 目的	265
第 2 節 方法	265
第 3 節 結果	265
第 4 節 考察	284
第 8 章 研究 10 いじめの被害・加害経験とソーシャルサポートの関連性	292
第 1 節 目的	292
第 2 節 方法	292
第 3 節 分析 1 結果	292
分析 2 結果	303
分析 3 結果	313
第 4 節 分析 1 考察	329
分析 2 考察	332
分析 3 考察	336
第 9 章 総合考察	339
引用文献	352
資料	362
謝辞	

第1章 問題提起と目的

子ども達の日々の学校生活においては、さまざまな問題が生じている。そして、現在の学校現場における深刻な課題の一つに「いじめ」問題がある（田村，2015）。さまざまな国や地域で行われた研究は、いじめが被害者や加害者だけでなく、周囲の生徒の学業成績，心理的健康，社会的関与にも悪影響を及ぼすことを示している（Craig, Pepler, & Atlas, 2009）。

日本でいじめ問題に取り組んでいる森田・清永（1986）は、現代のいじめの集団構造は基本的には「加害者」，「被害者」，「観衆」，「傍観者」という四層構造からなっていることを明らかにしている。さらに，「観衆」と「傍観者」は，いじめの抑止にも助長にも重要な要素であり，いじめが誰に，どんな手口で，どれだけ長く陰湿に行われるかは，加害者や被害者によっても異なり，同時にかなりの数にのぼる「観衆」と「傍観者」の反応によっても決まってくることを指摘している。特に，思春期の入り口に相当する中学時代について，丸山（1999）はいじめの発見件数が急激に増加する時期であり，この時期のいじめ体験の特徴は加害者が多くなることを明らかにしている。また，子ども対象の調査としては国立教育政策研究所（2013）の報告がある。これは，6年間の追跡調査を踏まえた貴重なデータであり，およそ9割の子どもがいじめの加害・被害どちらかの体験をしているという結果を示している。このことは，大人の知り得ないところで何倍もの数のいじめが存在することを明らかにしている（松下，2015）。このように，日本では，いじめに対する明確な定義づけをもとに様々な研究が行われている。

一方，近年のモンゴルでは，児童生徒によるいじめや犯罪が多発しており，学校におけるいじめや犯罪の問題の深刻化について新聞などで報告されている。また，教育現場では，いじめ加害者，被害者である子どもたちに対する心理的支援があまりなされないままに，転校に至るという現状がある。そして，支援がなされずに社会に出た子どもたちが犯罪行為に及んだ事例も数多く報告されている。しかし，モンゴルにおいては，また，いじめの定義もなく，いじめに

関する調査や研究が見当たらない。したがって、いじめの現状、原因などを把握し、学校現場におけるいじめに対して効率的な対策を実施している諸外国の取り組みを導入することを検討することには社会的意義があるかもしれない。そこで、本研究ではモンゴルの中学校における生徒間のいじめ実態を明らかにすることを目的とする。そして、モンゴルのいじめ問題の対応策の手がかりについても検討することとする。

第2章 研究1: モンゴルの中学校におけるいじめに関する研究

ーいじめの被害・加害経験と自尊感情及びストレス反応との関連ー

本章ではモンゴルの教育現場のいじめ対応策の不十分さを問題とし、モンゴルの中学校における生徒間のいじめの実態を明らかにする。また、いじめ被害・加害経験と自尊感情及びストレス反応との関係も明らかにし、モンゴルにおけるいじめ問題の対応策を検討する際の基礎資料を得ることを目的とする。

具体的には、次の4点を研究の目的とする。

目的1：いじめの実態を明らかにするとともに、学年及び性における差異を検討する。

目的2：いじめ被害・加害経験と自尊感情との関連を検討する。

目的3：いじめ被害・加害経験とストレス反応との関連を検討する。

目的4：いじめ被害・加害経験、自尊感情及びストレス反応の全体的影響過程を検討する。

第2章の結果

本研究は、モンゴルの中学生を対象に、いじめの被害経験・加害経験に関する調査を行い、その実態を明らかにした。いじめ被害経験については、性別では「仲間はずれ」「からかい」「軽い叩き」「酷い叩き」「金品の盗み」「PC 携帯での誹謗中傷」の全ての項目で男子が女子よりも多く、学年別では9年生が最も多い結果となった。一方、いじめ加害経験では「軽い叩き」「酷い叩き」「金品の盗み」の項目で男子が多く、加害経験も9年生で多く、8年生では少なかった。

次に、いじめ被害・加害経験と自尊感情の関係を分析した結果、被害経験のレベルが高いほど自己否定感が高くなり、自尊感情が低下することが確認された。また、いじめ被害経験が高いほどストレス反応も高くなることが明らかになった。さらに、いじめ被害・加害経験が自尊感情とストレス反応に与える影響を検討するため、共分散構造分析を行った結果、被害経験がストレス反応に影響を与え、ストレス反応が自尊感情に影響を与えるモデルが概ね適切であることが示された。

第2章の考察

本研究の結果により、モンゴルの中学生におけるいじめの被害経験・加害経験において、性別や学年に応じた差異が確認された。男子や9年生でいじめ経験が多いという結果は、文部科学省（2020）の報告とも一致しているが、先行研究（平松，2004；吉川他，2012）では異なる性差の結果が示されており、いじめの具体的内容による差異について今後さらに検討する必要があると考える。また、モンゴルでは中学3年生にあたる9年生でいじめ経験が多いことが確認されたが、日本の調査では逆の傾向（中1 > 中2 > 中3）が報告されており、モンゴル特有の学年差をさらに検討する必要がある。

いじめ被害経験が自尊感情やストレス反応に与える影響については、いじめ被害が自己否定感の上昇を伴い、自尊感情の低下に結びつくことが確認され、多くの先行研究（吉川他，2012；大久保，2012）と一致する結果となった。また、ストレス反応が自尊感情に影響を与えることも確認されており、レジリエンスやストレス低減が自尊感情向上に寄与することが示唆される。

今回の調査結果は、モンゴルにおけるいじめの実態を明らかにするだけでなく、いじめ防止教育の必要性を示唆するものである。また、モンゴルにおけるいじめの実態調査が少ない中で、本研究が今後のいじめ防止対策の基礎資料として貢献できることが期待される。

第3章 モンゴルの中学生のいじめ調査研究で使用する心理尺度の標準化

研究2 モンゴル語版中学生用自尊感情・他尊感情尺度の標準化

第2章によって、いじめの被害経験と加害経験について、学年差及び性差を検討した結果、被害経験、加害経験ともに、性別では男子の方が女子よりも多く、学年別では、9年生が多く、8年生は少なかった。いじめ経験と自尊感情との関連では、被害経験のレベルが高いほど自己否定感が高くなり、自尊感情が低下することが確認できた。いじめ経験とストレス反応については、被害経験のレベルが高いほどストレス反応が高いことが確認できた。全体的な影響過程の検討では、被害経験がストレス反応を高め、自尊感情を低下させることが確認できた。

第2章では、モンゴルの中学生におけるいじめについて、実態を明らかにできたことの意義は大きい。分析結果の内容は、いじめ研究の先進国である日本の知見と合致する点も多く、今後のモンゴルにおけるいじめ防止対策を検討する際の参考にすることができる。この研究から得られた知見はモンゴルのいじめ研究の端緒となるものとする。第2章の研究はモンゴルの中学生におけるいじめのパイロットスタディに相当するものであった。このため、使用した心理尺度は日本で標準化されたものをそのままモンゴル語に翻訳して使用していた。モンゴルの中学生のいじめの研究を深めていくためにはモンゴルの中学生を対象として心理尺度の標準化がおこなわれなくてはならない。

他尊感情について、いじめ問題に取り組む上で、他尊感情尺度は重要なツールとして利用されている。他尊感情尺度は、他人への尊重や配慮、思いやりなどの要素を測定するための尺度であり、いじめの予防や対策に役立つことが示されている。Storch, Bravata, & Horowitz (2005) の研究では、他尊感情尺度がいじめ被害者や加害者の行動や感情に関連していることが明らかになった。研究結果は、他尊感情の低さがいじめ加害者の特徴であり、他尊感情の高さがいじめ被害者の特徴であることを示している。また、他尊感情尺度はいじめ問題の予防にも有用なことが報告されている。Crick, Ostrov, & Werner (2006) の研究では、他尊感情の高い中学生は、いじめ行動を起こしにくく、

かつ被害者になりにくいことが示された。この研究結果は、他尊感情の向上を促すプログラムがいじめ問題の予防に有効である可能性を示唆している。

他尊感情は、自己の価値や幸福だけでなく、他者の価値や幸福も重視する心の状態である。自尊感情と他尊感情は密接に関連しており、互いに影響しあうことがある。自己を尊重し他者を尊重する能力は、個人の社会的関係や集団の健全性に大きな影響を与えることが研究で示されている（Andersen & Chen 2002）。

これらの研究から、他尊感情尺度はいじめ問題の理解や予防に役立つことが期待される。学校や教育機関は、他尊感情を向上させる取り組みを導入することで、いじめ問題の軽減や予防に努めることが重要である。

日本において、堀内、森田（2018）は、他尊感情と子どもの社会的行動の関連性に焦点を当てている。この研究では、中学生を対象にアンケート調査を行い、他尊感情の高い中学生ほど社会的行動（共感、協力など）が積極的であることが示された。これは、他尊感情が中学生の社会的関与やいじめ問題への関与に影響を与える可能性を示唆している。柴田（2016）は、小学校低学年児童における他尊感情と親社会化の関連性について探究している。この研究では、親が子どもに他尊感情を示すことが、子どもの他尊感情の発達といじめへの関与に関連していることが示唆された。

以上のことから、本研究ではモンゴル語版の中学生用他尊感情尺度の標準化を行い、モンゴルの中学生におけるいじめ問題の実態調査を行うことを目的とする。

研究 2 の結果と考察

モンゴル語版中学生用自尊感情・他尊感情尺度の 30 項目に対して、天井効果と床効果がある項目を除いて、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。最終的に解釈可能な 3 因子 24 項目を抽出した。

第 1 因子は「人が頑張っていると、応援しようと思う」、「人が幸せそうだと自分の嬉しくなる」などの 10 項目から構成されていたので「他尊感情」と命名した。第 2 因子は「私は、他の大半の人と同じくらい物事がこなせる」、「私は、自分のことを前向きに考えている」などの 10 項目から構成され「自尊感情」と命名した。第 3 因子は「時々、自分は役に立たないと強く

感じることもある」，「時々，自分はまったくダメだと思う事がある」などの4項目から構成され「自己否定感」と命名した。

以上の3つの因子は日本の先行研究と類似していたと考えられる。

研究3 モンゴル語版中学生用ストレス反応尺度の標準化

栗田 (2012) によると，「いじめはいじめの被害者に抑うつや自尊心の低下，心身症，対人不安などの症状をもたらし，終息した後も長期間にわたって影響を及ぼすことがある」と報告されている。さらに，いじめ被害者は青年期後期においても適応状態が悪い傾向が見られることが荒木 (2005) の研究で示されている。また，Hawker と Boulton (2000) の研究では，いじめ被害者が抑うつや不安といった心理的な問題を抱えやすいことが明らかになった。いじめによるストレスは，被害が終息した後も継続して影響を与える可能性がある。加えて，岡安と高山 (2000) による調査では，いじめ被害者と加害者の双方に不機嫌・怒りや無気力のレベルが高い傾向が報告されている。また，教師や友人との関係が悪い場合，加害者としての攻撃行動が増加することが示唆されている。Nishina, Juvonen, & Witkow (2005) では，いじめ被害者が頭痛や腹痛などの身体症状を報告する頻度が高いことが示されている。また，いじめ被害者は慢性的なストレスにさらされており，これが身体的な健康にも影響を及ぼす可能性がある」と指摘されている。

さらに，いじめ問題は心理的なストレスだけでなく，学業成績にも悪影響を及ぼすことが示されている。Fekkes, Pijpers, & Verloove-Vanhorick (2004) の研究によれば，いじめ被害者は学校での集中力や学習意欲の低下，成績の低下などを経験しやすいと報告されている。

これらの研究から，中学生のいじめ問題は被害者の心理的および身体的な健康に深刻な影響を及ぼし，学業成績にも悪影響を与えることが示唆されている。

以上の研究から，中学生のいじめ被害者は心身の健康に悪影響を及ぼすことが示されている。同様に，加害者も心身の健康状態が悪い可能性がある。以上

のことから、モンゴル語版の中学生用ストレス反応尺度の標準化を行うことを目的とする。この尺度を用いることでモンゴルの中学生におけるいじめ問題の研究に貢献できると考えられる。

研究 3 の結果と考察

モンゴル語版中学生用ストレス反応尺度 64 項目に対して、天井効果と床効果がある現目を除いて、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。最終的に解釈可能な 4 因子 23 項目を抽出した。

第 1 因子は「呼吸が苦しくなる」、「胸が痛む」などの 7 項目から構成され「ストレス性の身体症状」と命名した。

第 2 因子は「なにもやる気がしない」、「頭の回転がにぶく考えがまとまらない」などの 7 項目から構成され、「無力感」と命名した。

第 3 因子は「悲しい」、「泣きたい気分だ」などの 5 項目から構成され「情緒不安定」と命名した。

以上の 4 つの因子は日本での先行研究と類似する結果であった。

第 4 章 研究 4 いじめの被害・加害経験と他尊感情・自尊感情・自己否定感情、ストレス反応との関連について

第 1 章で述べたようにモンゴルの中学校でのいじめに関する研究はまだほとんど行われていない。まずはモンゴルの中学生のいじめに関する実態調査研究が行われることが望まれる。そこで本章では、第 3 章で作成した尺度を用いて、モンゴルの中学生におけるいじめの実態を調査・分析することを目的とした。具体的には、モンゴルの中学生のいじめ被害経験と加害経験が他尊感情・自尊感情・自己否定感情ならびにストレス反応とどのように関連するかについて実態調査を行うこととした。このことから、モンゴルの中学生のいじめにまつわ

る心理的問題やストレス反応の基礎情報を収集することでいじめ問題の解決の一助となることが期待される。

研究 4 の結果と考察

この研究では、モンゴルの中学生におけるいじめ被害および加害経験が、他尊感情、自尊感情、自己否定感情、ストレス反応に与える影響について検討した。第 1 に、いじめ被害経験のある生徒は、他尊感情の低下や自己否定感情の増加、ストレス性の身体症状の増大が確認された。特に、ネットいじめによる被害は、他尊感情に悪影響を及ぼすことが示唆された。また、いじめ被害が情緒不安定感や無力感の増加、攻撃的な反応の増加にも関連していたことが明らかになった。これらの結果は、日本国内の先行研究とも一致しており、いじめが生徒の心理的および身体的健康に与える多大な影響を再確認するものであった (Mizuno et al., 2022; Mullan et al., 2023)。

また、いじめの加害者の種類に関わらず、いじめ被害経験が自己否定感情やストレス反応を強く引き起こすことが確認された。特に、教師からのいじめ被害は、他尊感情の低下や無力感の増大に顕著な影響を与えることが示唆され、教育現場におけるいじめ対策の重要性を強調するものであった (Zhao et al., 2021)。また、モンゴル国内では、いじめに関連する自殺が増加しており、学校内でのいじめ問題が社会的に大きな課題となっている (Х.Монголхатан, 2016; Засгийн газрын мэдээ, 2020)。

いじめ加害経験が中学生自身に与える影響についても検討した結果、いじめ加害経験は他尊感情の低下や自己否定感情の増加に関連していることが示された。さらに、加害経験がある生徒は、情緒不安定感や攻撃性の反応が高い傾向があり、いじめ加害行動が生徒自身の心理的および身体的健康に悪影響を及ぼしていることが明らかになった (Choi & Park, 2021)。

これらの結果は、いじめが被害者および加害者双方に深刻な心理的・身体的影響を与えることを示しており、モンゴルにおけるいじめ防止対策の重要性を再認識させるものである。社会全体での早期介入と包括的な支援が求められると考えられる。。

第5章 研究5 いじめの被害・加害経験に与える心理的変数の総合的影響 の評価

本章では、第3章で作成した尺度を用いて、モンゴルの中学生におけるいじめの実態を調査・分析することを目的とした。第4章でいじめの被害・加害経験と他尊感情、自尊感情、自己否定感、及びストレス反応との関連性について分析を行った。第4章では、各心理変数ごとに分析が行われたが、各心理変数間には関連性があるため、複数の心理変数といじめ経験との関連性について同時に分析することが望まれた。そこで、本章では、いじめ被害・加害経験に対して各心理変数がどのように関連するか線形判別分析を用いて検討することを目的とした。

研究5の結果と考察

分析では、モンゴルの中学生におけるいじめの被害・加害経験と7つの心理指標（自尊感情、他尊感情、自己否定感情、ストレス反応：無力感、情緒不安定、ストレス性の身体的症状、攻撃性の反応）との関連性を検討した。線形判別分析の結果、いじめの被害および加害経験が生徒の心理的および身体的健康に深刻な影響を与えることが明らかになった。

まず、いじめの被害経験がある生徒は、情緒不安定、無力感、自己否定感情、ストレス性の身体的症状、攻撃性の反応など、多くの心理的負担を抱える傾向が確認された。特に女子生徒においては、関係性攻撃（仲間外れや悪口）が無力感や情緒不安定、ストレス反応を引き起こしやすいことが示唆された（岡安・高山，2000）。男子生徒においても、身体的攻撃の被害が情緒不安定や自己否定感情、自尊感情の低下と関連していた（吉川・今野・会沢，2012）。

次に、いじめ加害経験がある生徒は、攻撃性の反応や情緒不安定、自己否定感情が高く、特に加害行為が心理的ストレスとして現れることが示された。加害経験は無力感やストレス性の身体的症状とも関連し、加害者自身も心理的負担を抱えていることが分かった（岡安・高山，2000）。また、加害行動が生徒の学業や対人関係に悪影響を与える可能性が示唆された。

いじめ被害および加害経験が中学生の心理的健康に与える影響は深刻であり、特に加害行為がストレス反応を増幅させる悪循環が見られた。これらの結果は、

いじめ予防および加害者・被害者の支援が重要であることを強調しており、心理カウンセリングの充実やいじめを許さない環境づくり、早期対応の教育プログラムの導入が求められることなどが示唆された。

第 6 章 モンゴルの中学生のいじめに関する調査研究で使用する心理尺度の標準化（その 2）

本章では、モンゴルの中学生におけるいじめ被害がストレス反応に及ぼす影響を低減させる要因として、コーピングとソーシャルサポートの役割に着目した。これまでの研究から、いじめ被害者は抑うつや不安感情が強く、身体的および心理的な不調を抱えることが多いことが示されている（黒川， 2010）。また、コーピング戦略やソーシャルサポートがストレス反応を和らげる重要な要因であることが示唆されている（浦光・南・稲葉， 1989；細田・田嶋， 2009）。特に、問題焦点型コーピングが長期的なストレス管理に効果的であり、感情焦点型コーピングは短期的にストレスを軽減するが、場合によっては逆にストレスを強化することがある（浦光・南・稲葉， 1989）。ソーシャルサポートについては、家族や友人からの支援がストレスのバッファーとして機能し、精神的健康に寄与することが明らかにされている（細田・田嶋， 2009）。

本章の目的は、モンゴルの中学生に適応可能なコーピング尺度およびソーシャルサポート尺度を標準化し、これらがいじめ被害とストレス反応の関連を媒介する役割を検討することである。日本における先行研究を参考に、モンゴルの教育現場におけるストレス対処のための健康教育的介入プログラムの必要性を示し、いじめ被害を低減するための方策を提案する。

研究 6 の結果と考察

研究 6 では、モンゴル語版中学生用コーピング尺度に対し因子分析を行い、最終的に 3 因子 26 項目を抽出した。第 1 因子は 12 項目で構成され、「積極的対処」と命名し、問題解決に向けた行動を示す項目が含まれている。この因子は、日本の研究結果と一致しつつも、モンゴルの実態に基づいた項目も含まれ

ている。第2因子は7項目からなり、「他者からのサポート希求」と命名した。この因子は、他者からの助言や支援を求める行動に関連しており、日本の研究とも一致しているが、モンゴルに特有の項目も見られる。第3因子は7項目で構成され、「逃避・回避的対処」とし、問題からの逃避や受容を示している。信頼性の検討において、各因子は十分な内的整合性を有することが確認された。また、因子間の相関分析の結果、逃避・回避的対処は他の因子と相関が低く、積極的対処や他者からのサポート希求とは独立して機能する可能性が示唆された。これらの結果から、逃避・回避的対処がストレスや健康に与える影響について、今後さらに検討する必要がある。

研究7の結果と考察

研究7では、モンゴル語版中学生用仲間へのサポート期待尺度の標準化を行い、探索的因子分析の結果、解釈可能な2因子9項目が抽出された。第1因子は「仲間からの情緒的サポート」として、喜びや悲しみ、悩み事に対する共感や支援を提供する5項目で構成され、第2因子は「仲間からのコミュニケーション的サポート」として、困難な状況での相談や問題解決をサポートする4項目で構成されていた。これらの因子は、過去の研究結果（馬岡・甘利・中山，2000；中井，2016）と一致しており、仲間からのサポートが生徒の心理的安心感や学校適応感に寄与することが示唆された。

信頼性の検討において、情緒的サポートは McDonald の $\omega = .899$ ，Cronbach の $\alpha = .898$ ，コミュニケーション的サポートは McDonald の $\omega = .849$ ，Cronbach の $\alpha = .848$ と、両下位尺度ともに高い内的整合性を示し、十分な信頼性が確認された。また、両因子間には強い相関関係が見られた（ $r = 0.830$ ）。これらの結果は、仲間からのサポートが生徒の精神的健康や学校生活における適応において重要な役割を果たすことを示している。

研究8の結果と考察

研究8では、モンゴル語版中学生用コーピング尺度の標準化を行い、探索的因子分析の結果、解釈可能な2因子8項目が抽出された。第1因子は「先生からの支援的サポート」として、努力や成長を認め、学業面での支援を提供する

4 項目で構成され、第 2 因子は「先生からの情緒的サポート」として、感情面での支援や励ましを提供する 4 項目で構成されていた。これらの因子は、馬岡・甘利・中山（2000）の研究結果と一致しており、教師からのサポートが生徒の心理的安定に寄与することが示唆された。

さらに、内的整合性の検討では、支援的サポートの McDonald の $\omega = .891$ 、Cronbach の $\alpha = .890$ 、情緒的サポートの McDonald の $\omega = .880$ 、Cronbach の $\alpha = .882$ と、両因子ともに高い信頼性が確認された。また、両因子間には強い相関関係（ $r = 0.780$ ）が見られた。これらの結果は、教師からのサポートが生徒の生活満足度や心理的健康に重要な役割を果たすことを示している。性差においても、男子生徒にとって教師のサポートが重要であり、女子生徒にとっては家族からのサポートがより重要であることが他の研究で示されており（山上・相良，2019），今後は生徒の個別ニーズに応じた支援が必要であることが示唆された。

第 7 章 研究 9 過去と現在のいじめ経験の高低による各心理尺度得点の差について

第 6 章で作成した尺度を用いて、モンゴルの中学生におけるいじめの実態を調査・分析することを目的とした。具体的には、過去と現在のいじめの被害・加害経験とコーピング、ソーシャルサポートとの関連性について分析を行うこととした。ただし、ストレス反応も測定しているので本章でも分析対象とした。

研究 9 結果と考察

分析の結果、いじめ被害経験の多い生徒は、ストレス反応（身体症状、無力感、情緒不安定、攻撃性反応）において有意に高い得点を示し、被害経験が長期的に身体的・心理的健康に悪影響を与えていることが確認された。また、被害生徒は回避的な対処行動を取る傾向が強く、社会的サポート（特に仲間や教師からの情緒的・コミュニケーション的サポート）が不足していることが示された。これにより、いじめ被害者が孤立しやすく、心理的ストレスが増大することが示唆された。

一方、いじめ加害経験の多い生徒も、身体的ストレス反応、無力感、情緒不安定、攻撃性反応が高いことが確認された。加害行為は加害者自身の精神的・身体的健康に悪影響を与えており、特に無力感や逃避的な対処行動が強く現れている。また、加害生徒は他者からのサポートを求める傾向があるものの、実際には仲間や教師からの支援が不足していることが明らかとなり、加害行為の悪循環に陥るリスクが高いことが示唆された。

これらの結果は、いじめ被害者および加害者への早期の心理的介入と支援の重要性を強調している。特に、学校や地域社会において、仲間や教師からの情緒的サポートやコミュニケーションを強化し、いじめ問題に対する包括的な支援体制を整備する必要性が示された。いじめによる心理的負担を軽減し、生徒の健全な成長を支援するための積極的な介入が求められる。

第 8 章 研究 10 いじめ経験とソーシャルサポートとの関連性

第 6 章と第 7 章の研究から、ソーシャルサポートがいじめの被害・加害経験、およびストレス反応と関連することが示唆された。そこで、本章では、ソーシャルサポートの高低と過去と現在のいじめ被害・加害経験の違いについて検討することを目的とした。同時に、ストレス反応の違いについても分析を行うこととした。

研究 10 結果と考察

本章では、モンゴルの中学生におけるソーシャルサポートの高低が過去および現在のいじめ被害・加害経験やストレス反応に与える影響を検討した。結果、家族や教師、友人といった主要な支援者からのソーシャルサポートが、生徒のいじめ経験やストレス反応に大きく影響を与えることが確認された。

父親や母親からのサポートが高い生徒は、いじめ被害・加害経験が少なく、ストレス反応（身体症状、無力感、情緒不安定、攻撃性反応）も低いことが明らかとなった。特に情緒的な支援が、生徒の心理的安定感を高め、いじめ関連の問題から守る役割を果たしている。また、兄弟姉妹や友人からのサポートも、生徒がいじめに巻き込まれにくく、ストレス反応を軽減する効果があることが

示唆された。教師からのサポートは、学校生活全般にわたり生徒の心理的セーフティネットとして機能し、対人関係やストレスに対する耐性を強化する効果が確認された。

いじめ被害経験のある生徒では、ソーシャルサポートが高い場合、ストレス反応が顕著に低く、特に家族や教師からの支援が心理的な負担を軽減する要因であることが示された。また、現在いじめ加害行為を行っている生徒に関しても、教師や友人からのサポートが健全な感情調整を促進する効果があることが示唆された。

これらの結果から、いじめ問題の予防や介入において、家庭や学校、友人間の信頼関係や支援体制の強化が不可欠であることが明らかになった。ソーシャルサポートを充実させることで、中学生のストレス反応を軽減し、いじめ行為の予防および健全な成長を支援するための重要な手段となることが示唆された。

第9章 総合考察

本研究の結果から、モンゴルの中学生におけるいじめ被害および加害行為が、心理的・身体的健康に深刻な悪影響を与えていることが明らかになった。特に、いじめ被害者は無力感、情緒不安定、身体的ストレス反応、攻撃性反応が顕著であり、いじめ加害者もまた同様に深刻なストレスや情緒不安定を抱えている。これらの問題に対処するためには、家庭、学校、地域社会全体での包括的ないじめ防止対策が必要である。最後にいじめ問題の予防や対応に関する健康教育的介入のあり方について検討した。本研究がモンゴルのいじめ問題の対応に貢献することが期待される。

主な引用文献

- Andersen, S. M.& Chen, S. (2002). The relational self: An interpersonal social-cognitive theory. *Psychological Review*, 109(4), 619-645.
- 荒木真由美 (2005). いじめ被害体験者の心理的適応に及ぼす影響: 青年期後期における検討. *臨床心理学*, 25(2), 131-143.
- 田村修一 (2015). 小学校における「いじめ」の被害者・傍観者の被援助志向性 日本教育工学会論文誌, 39, 33-36.
- Craig, W. M. Pepler, D. & Atlas, R. (2009). Observations of bullying in the playground and in the classroom. *School Psychology International*, 30(4), 383-410.
- 森田洋司・清永賢二 (1986). いじめ: 教室の病い 金子書房 pp.21-38.
- 丸山真名美 (1999). 思春期の心理的特徴と「いじめ」の関係 心理科学, 21, 1-16.
- 国立教育政策研究所 (2013). いじめ追跡調査 2010-2012 文部科学省 Retrieved from https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2507sien/ijime_research-2010-2012.pdf (2016年5月1日)
- 松下一世 (2015). いじめに関する子どもの意識調査結果から見る 道德教育・人権教育の課題 J.Fac.Edu.SagaUniv., 19, 37-51.
- 文部科学省 (2020). 令和元年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」文部科学省初等中等教育局児童生徒課 文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20201015_mext_jidou02-100002753_01.pdf (2021年9月18日)
- 平松芳樹 (2004). いじめの意識調査による教育心理学的取り組み 1 中学生の場合 中国学園紀要, 3, 53-58.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害－加害経験と自尊感情との関係－大学生を対象にした遡及的調査研究－『人間科学研究』文教大学人間科学部, 34, 169-182.
- 大久保純一郎 (2012). 回顧的に報告されたいじめ体験と青年期心性の関連性 (1): 対人恐怖心性, 自尊感情, ストレス反応について 同志社大学教職課程年報, 1, 57-66.
- Storch, E. A. Bravata, E. A. & Horowitz, L. M. (2005). Perceived peer

- victimization and social anxiety in adolescence. *Journal of Anxiety Disorders*, 19(3), 345-358.
- Crick, N. R. Ostrov, J. M. & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, physical aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34(2), 131-142.
- 堀内悠希, 森田直也 (2018). 他尊感情と子どもの社会的行動に関する研究 心理学研究 第 65 巻 (第 3 号), 215-224.
- 柴田博美 (2016). 小学校低学年児童における他尊感情と親社会化の関連性についての研究 発達心理学研究, 第 32 巻 (第 4 号), 345-354
- s岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1992). 中学生用ストレス反応尺度 出典論文・関連論文野友信・吾郷晋浩 (編)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, **48**, 410-421.
- Nishina, A. Juvonen, J. & Witkow, M. R. (2005). Sticks and stones may break my bones, but names will make me feel sick: The psychosocial, somatic, and scholastic consequences of peer harassment. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 34(1), 37-48.
- Fekkes, M. Pijpers, F. I. & Verloove-Vanhorick, S. P. (2004). Bullying behavior and associations with psychosomatic complaints and depression in victims. *Journal of Pediatrics*, 144(1), 17-22.
- Kh. Mongolkhatan; Х. Монголхатан (2016). Өсвөр үеийнхнээ үхэл рүү бүү түлхээч ikon.mn. Retrieved from <https://ikon.mn/n/oze> (August 15, 2020.)
- 吉川延代・今野義孝 (2011). 中学生におけるいじめとストレスの関連性についての研究 人間科学研究 文教大学人間科学部 33.

- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2012). いじめの被害－加害経験と自尊感情との関係－大学生を対象にした適及的調査研究－『人間科学研究』文教大学人間科学部, **34**, 169-182.
- 栗田朝子(2012). いじめと精神的トラウマ. 日本心理臨床学会誌, 10(1), 97-105.
- 黒川雅幸(2010). いじめ被害とストレス反応, 仲間関係, 学校適応感との関連:—電子いじめ被害も含め検討— カウンセリング研究, **43**(3), 171-181.
- 丸山真名美(1999). 思春期の心理的特徴と「いじめ」の関係 心理科学, **21**, 1-16.
- 松下一世(2015). いじめに関する子どもの意識調査結果から見る 道徳教育・人権教育の課題 J.Fac.Edu.SagaUniv., **19**, 37-51.
- Mimura, C. & Griffiths, P.(2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. Journal of Psychosomatic Research, **62**, 589-594.
- 三浦正江(2002). 中学校用学校ストレス反応測定尺度の作成 中学生の学校生活における心理的ストレス研究に関する研究 風間書房 pp.66-73.
- 三浦正江・坂野雄二・上里一郎(1997). 中学生用コーピング尺度 心理測定尺度集Ⅲ－心の健康をはかる＜適応・臨床＞－ サイエンス社 pp.32-36.
- 餅川正雄(2011). 学校のいじめ問題に関する研究(Ⅲ) 広島経済大学研究論集, **34**, (1), 51-70.